21PO-am055S

呼吸器悪性腫瘍患者の吃逆に対する柿蔕の治療効果及び効果寄与因子に関する研究（2）

○森 香菜子[1], 鈴木 小夜[1], 田中 将貴[2], 川澄 賢司[2], 野村 久祥[2], 松井 礼子[2], 川﨑 敏克[2], 中村 智徳[1]（[1]慶應大薬，[2]国立がん研究センター東病院薬）

【目的】がん患者は多数の吃逆発生要因を抱えている。柿蔕は古くから吃逆に使用されているが有効性についてのエビデンスはない。本研究では、吃逆に対する柿蔕の有効性を明らかにし、患者背景や証に基づく吃逆の個別化治療を目指す。

【方法】2013 年 1 月 1 日～2018 年 5 月 6 日に国立研究開発法人国立がん研究センター東病院で呼吸器悪性腫瘍に対する治療を受け、柿蔕もしくはクロルプロマジン（CPZ）の処方歴がある患者を対象に、吃逆治療薬の有効性や患者背景について後方視的に調査した。（国立研究開発法人国立がん研究センター研究倫理審査委員会研究課題番号 2016-485）

【結果・考察】対象患者 80 名の吃逆発生および治療に関連する全 172 エピソードにおいて、柿蔕単剤処方の有効率は 100%（n=19）、CPZ 単剤処方は 72.1%（n=104）、柿蔕と CPZ 併用処方は 75%（n=32）であった。吃逆治癒までの日数で評価したところ、吃逆発生後 1 日以内に吃逆が消失した割合は CPZ 単剤処方が最も大きく（41%、n=30）、一方、吃逆発生後 2 日目までを含めると、2 日以内に吃逆が消失した割合が最も大きかったのは柿蔕単剤処方であり（66%、n=4）、服薬開始後から吃逆消失までが 2 日以内であった割合もエピソード数が少ないものの柿蔕単剤が最も大きかった（50%、n=2）。柿蔕は、即効性は CPZ に劣るが緩徐に効果を発揮する傾向が示された。また、柿蔕単剤処方の有効群のシスプラチン（CDDP）投与量（mg/m^2/course）は、柿蔕を含む処方の無効群よりも多かった（p=0.009）。

【結論】呼吸器悪性腫瘍患者において、柿蔕の有効性は CPZ とは異なる経過を示し、一定数の患者に有効性を示すことが明らかとなった。CDDP 投与量と柿蔕有効性の関連については今後さらに検討していく必要がある。